

目 次

口 絵

刊行のことば

監修のことば

まえがき

凡 例

上田市誌刊行会長 上田市長 母袋創一
東京大学教授 文学博士 佐藤信

第一章 織物にみる上田のあゆみ

第一節 麻と木綿

一 繩文・弥生・古墳時代

出土品としての纖維製品

二 古代から中世へ

正倉院宝物のなかの布 文献のなかの信濃布

三 中世から近世へ

和州郡山からの繰綿 上田地方への木綿普及 木綿をめぐる動き

第二節 絹織物

一 古代・中世の絹織物

貢納物としての絹 記録のなかの「ツムギ」

二 近世の絹織物

上田における絹織物

コラム 真田紐

第二章 近世上田の蚕糸業

第一節 近世中期の蚕糸業

一 近世中期の養蚕と織物

宝永の上田藩村明細帳 宝永期の養蚕普及状況

上田縞の流行

二 上田縞と上田紬

上田縞の見本 享保十九年織立注意書 上田縞・上田紬の上方移出

三 蚕種と養蚕書

蚕種製造の流れ 『新撰養蚕秘書』にみる養蚕術

第二節 近世後期の蚕糸業

一 上田城下の賑わい

為登糸の移出 上田名産の上田縞・縞紬 理想の上田紬

25

25

20

18

15

15

二 養蚕・蚕種業の発展

26

為登糸

上田縞・縞紬

理想の上田紬

11

9

桑畠の拡大と桑の売買 上塩尻村の蚕種商人 蚕種商人仲間の結成 信州上田蚕種の確立

三 上田藩の国産品統制

産物改所の設置 産物会所の開設

第二章 養蚕業の発展

第一節 養蚕業の普及

一 横浜開港の衝撃

養蚕業への脚光 本格的養蚕業への道

二 養蚕業の広まり

『町村誌』にみる蚕業 乾湿計の発明 清涼育から保温折衷育へ 明治初期の飼育法

第二節 養蚕業の躍進

一 桑園の拡大

上田小県地方の桑園 桑園の技術的発展 優良桑苗の生産 桑仕立て方の変遷 桑園に化学肥料を

二 増える繭の生産量

県内最大の収繭量 夏秋蚕の登場 養蚕の労働力

三 養蚕技術の改良

全芽桑育の普及 養蚕組合の設立 蚕室の改良 繭糸会社の設立 霜害とその対策

第三節 養蚕業の変容——恐慌下の養蚕業——

一 養蚕経営の打撃

50 50

46

44

40

40

36

35

35

29

世界大恐慌と養蚕農家	生糸と人絆	養蚕農家の対応	農村更生運動	53	
二 養蚕業の変化					
養蚕実行組合の結成	産繭処理統制法と特約組合	桑園の整理改植			
三 大戦下の養蚕業	生糸消費国アメリカの変化	蚕糸業統制法の制定	文化育の導入	戦時下の繭増産計画	56
	コラム 蚕の一生	蚕糸業を知るための基本用語	食糧増産		
第四章 蚕種業の発展					
第一節 幕末・維新期					
一幕末開国期の動向					
蚕種貿易の始まり	蚕種貿易をめぐる動き				
二 明治初年の動向					
維新動乱のなかの蚕種業	明治四年「未年之事件」 ^{ひつじの}				
第二節 明治期					
一 蚕種業の発展					
上田盆地の蚕種の桑畑	千曲川沿岸に集中する蚕種屋	蚕種屋と種場	全国的産地へ	蚕種会社の設立	73
横浜蚕種焼き捨て事件	明治中期の蚕種				
二 蚕種業の近代化					
微粒子病とその対策	蚕種同業組合の結成	蚕品種の整理と統一			
三 蚕種検査の近代化					
	81	73	73	71	69
83					

平付けから枠付けへ

夏秋蚕種

風穴を利用した蚕種貯蔵

冷蔵庫を蚕種貯蔵に利用

蚕卵台紙の製造

第三節 大正・昭和期

一 蚕種の品種改良

優良糸と蚕種改良 一代交雜種の開発 雌雄鑑別のむずかしさ 上田蚕種株式会社の設立

県指定蚕種の奨励

人工ふ化の実用化 バラ蚕種

二 蚕種業の全盛期

全國一の蚕種產地へ 蚕種郷の塩尻村 蚕種取締所出張所設置 鉄道の開通と蚕種業

郵便による蚕種輸送

三 蚕種王国の崩壊

蚕種屋への衝撃 製糸会社による蚕種製造 没落する中小蚕種屋 原蚕種の國家管理へ

四 戰時下の統制

戰時体制下の統合 蚕糸業統制下の蚕種業

第五章 近代製糸の導入と発展

第一節 維新期の製糸業

一 生糸の輸出と改良

生糸の輸出と上田 輸出を支える生糸 生糸改会社から生糸改所へ 拡榮社の誕生

上田で第一回共進会 足踏座縫器に活路を見いだす 産業組合と揚返場 上田女紅場と織物業

二 洋式技術の習得

宮下理兵衛前橋製糸所へ 上田製糸所と小野組

富岡製糸場の工女に上田から

三 器械製糸業の発展

信陽館と器械製糸

常田館の上田進出

ときだ

水をめぐる問題

製糸工場と繭倉庫

上田倉庫と諏訪倉庫

上田倉庫と諏訪倉庫

大屋停車場の設置運動

コラム 生糸の商標

第二節 大正期の上田

一 経営規模の拡大

器械製糸工場の増加と変遷 共同の再繭工場信全社 生糸検査と関東大震災 筑水社の生糸取引

浦里の座繭製糸 繭の購入にかかる費用

二 繭糸技術の向上と副産物

繭糸技術の改良 水の利用と動力源 絹製品から靴下へ 信州上一番は最下位に
副産物の処理を専門の工場で

三 労働者の保護と製糸業

工場法による労働者の保護 製糸工場で働く男子工員 働く繭糸工女 工女募集にかかる費用
工女の賃金と賞罰制度 働く時間と休日の楽しみ

第三節 世界大恐慌と十五年戦争

一 製糸業の縮小と不況対策

糸価暴落と製糸工場の倒産 工場倒産で倉庫会社も 恐慌と不況対策 常田館の繭特定取引
セリプレーンで高い繭糸技術 多条繭糸機の登場 生糸の消費と藤本蚕業
上田共同再繭所料金値上げ 屑繭利用で収入を図る村

二 製糸労働者の推移と就職斡旋

切り下げられる工女の賃金 新しい職場を求めて 上 小販連が製糸をはじめる
衰退する製糸業

国内用生糸への転換 輸出停止後の生糸製造

コラム 蘭から生糸ができるまで

第六章 蚕糸教育と行政

第一節 小県蚕業学校

一 郡立小県蚕業学校の発足

蚕業学校の設立 学校の規則 校舎は丸掘の民家を改修 長野県官員になつた三吉米熊
ヨーロッパを視察した三吉米熊 開校と蚕業学校の教職員 生徒数と出身地

蚕業学校式飼育法と天気予報

権現坂に校舎移転

二 県立小県蚕業学校の発展

県立学校への移管 科編成と定員 学科課程 教員志望者の養成 寄宿舎 � 實習教育
産業会と友誼会 地域への貢献 卒業生の活躍 蚕糸業全盛期の蚕業学校 校舎が常入ときいりの現在地に移転
三吉米熊校長の逝去

三 戰争と蚕業学校

戦時体制下の学校 軍事教育と学徒動員 北海道援農隊の派遣 空襲による校舎焼失

四 小県蚕業高等学校

上田農業学校 小県蚕業高等学校の誕生 社会経済状況の変化と蚕業教育

第二節 上田蚕糸専門学校

一 上田蚕糸専門学校の設立

専門学校をめぐる動き 上田蚕糸専門学校の設立 上田蚕專の開校 絹糸紡績科と纖維化学科増設

戦時体制と纖維専門学校

二 信州大学纖維学部のあゆみ

信州大学纖維学部への転換 学科の改廃・増設と大学院設置

第三節 蚕業試験場

一 原蚕種製造所の設置

劣悪な生糸 原蚕種製造所の設置 原蚕種の製造と配布 生かされた研究成果

二 蚕業試験場の設立

蚕品種統一に貢献 蚕業試験場の研究体制

三 上田での蚕業試験場

上田への蚕業試験場移転 養蚕の近代化に貢献 上田の蚕業試験場の廃止

第七章 第二次大戦後の養蚕業・製糸業・蚕種業

第一節 蚕糸業の復活

一 養蚕業の復活

桑園の復興 養蚕農業組合の結成 稚蚕共同飼育の普及 省力多収繭の養蚕業へ 農業構造改善事業と養蚕業

二 蚕種業の復興

上田蚕種の復活 昭栄製糸による蚕種製造 蚕種の技術革新

三 製糸業の復興

生糸の輸出再開 戰後復興期の製糸業 自動織糸機の普及 国用製糸

第二節 蚕糸業の衰退と消滅

一 養蚕業の衰退と消滅

養蚕業の消滅

養蚕業が消えた日

蚕種・養蚕の近代化遺産

二 蚕種業の展開

蚕種製造量の減少

蚕種保存と研究

三 製糸業の転換

輸入糸の激増

製糸業の消滅と転換

近代遺産から学ぶもの

第三節 上田紬の復活と盛衰

一 上田紬の復興

年寄りに愛用された紬 上田紬の復活

二 紬ブームの中の上田紬

紬ブームの到来 上田紬の機屋

三 現在の上田紬

着物離れと新商品開発 土産品の中の上田紬

あとがき

参考文献

協力者・協力会社・団体

上田市誌の編さん組織

『上田市誌』全二二編の歴史と書評

本文略

参考文献

翻訳書・新成分子・回顧

特集企画

農林漁牧の商品開発と生産の中の上田市

三、農業の上田市

四、上田の産業・上田市の製造

五、農業上田の中心の上田市

六、半寄りの農業もみる上田の上田市や更那

七、上田市と野菜

選二章 上田市と畜産の歴史

一、飼人水の活用・通水渠の歴史・政治監査の歴史

二、排水渠の歴史・排水渠の歴史

三、通水渠の歴史・通水渠の歴史

四、通水渠の歴史・通水渠の歴史

五、養蚕業の歴史・養蚕業の歴史

六、養蚕業の歴史・養蚕業の歴史

第一章 通水渠の歴史と開拓